燎原

京都の民主運動史を語る会　会報　題字　住谷悦治

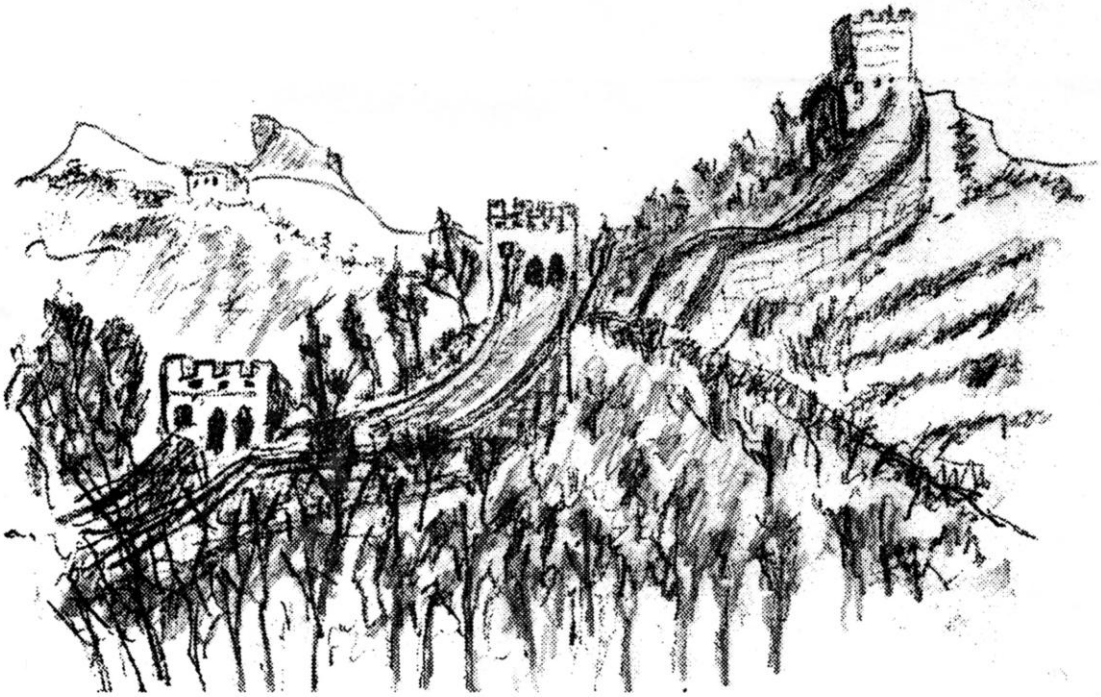
代表 岩井忠熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込〕

口座番号 01060=7=15762

加入者名 燎原社



1993. 10. 12　八達嶺の万里長城　奥田宣子

平林初之輔あれこれ　八木 康敞

特集・二〇〇〇年を迎えて

人間社会を解く「定理」　村島 昭男

戦争時代を顧みて　田代 幸子

追悼　前代表天野和夫先生

総会および春の例会のおしらせ

編集後記

平林初之輔あれこれ

八木　康敞

丹後は近くて遠い国になった。京都に住んでいて時間的には東京の方が早くいける。しかし「関ヶ原」を越えて東京の「街の灯」をなるべく見に行かないことにしている。

国道もない鉄道もない貧しい村の「黒部村」に生まれた「平林初之輔」が日本文芸家協会代表として、「パリ」で開かれた「世界ペン大会」に出席したのは、一九三一年（昭和六年）春のことだった。

細井和喜蔵を育て、なにくれとなく彼の面倒をみた平林初之輔は、一九三一年二月十一日、東京を出発、「パリ」に向かった。プロレタリア文学理論の創始者の彼は、約一ヶ月かかって「パリ」に着いている。

平林初之輔はパリに向かう前に、丹後に帰り、友人である「後藤鉄之助」?と「間人」で「痛飲」している。三月十九日、「パリ」に着いた。その三日後、三月二十二日、「街の灯」封切りのため、同じように「パリ」に着いた「チャップリン」について、次のように書いている。『「街の灯」は「サーカス」の行き方を踏襲するものだろうと観客に期待させる。ヴァージニア・チェリルの盲目娘は、チャップリンに気づかずに、華やかに笑い喜び、チャップリンは彼女に何もいい得ないで、一人さびしく花屋の前を通り過ぎるだろうと誰でもが期待する。ところが、チャップリンは万人の意表に出て、花賣娘は、チャップリンの手を握り、指先に残っている触感の記憶で、昔の恩人であることを知って「貴方でしたの?」という言葉が彼女の口からもれる。このシーンに、チャップリンは無限の余韻を含めて、そのままそれを観客の頭のうちに残している』と平林は「チャップリン巴里に来る」の中で述べている。あの「シーン」を見ると、貧困のなかに育ち、貧しい人たちとの、ふれあいを大切にした、「チャップリン」を痛いほど感じる。個人的な話になって申し訳ないが、戦後のビル・ラッシュになるまえの東京で、「ドタ靴」の「放浪紳士」の映画にどれだけ、はげまされたか知れない。平林初之輔のことは、宮津高校でおそわった堀江正夫先生から「こえの匂いがすると春がくる」と東京での保証人が同じ弥栄出身の平林初之輔であることをおききしていた。敗戦直後の宮津高校は、「女工哀史」の細井和喜蔵が、加悦の出身であり、笑いと涙をまぶしたような「キッド」のガラス割りの「シーン」、むりやり孤児院につれさられる「ジャッキィ・クーガン」においすがろうとする「チャップリン」をうけいれる面白い雰囲気があった。

平林初之輔が「オテル・マッサ」で五月二十七日から三日間開かれた第一回国際文芸家協会大会に日本代表として、早稲田の先生のまま出席し、その大会の印象を、東京朝日におくってきているが江戸川乱歩が編集した「平林初之輔遺稿集」の最後にのせられ、文学の方面では「尾崎紅葉や夏目漱石などの名前すら知ってる人がほとんどあるまい。日本は国際的仲間入りをする前に、こうした状態の地均しをする必要もあると考えている」と平林は六月八日の「国際文芸家協会大会の印象」の絶筆の最後を結んでいる。一九三一年という満州事変前夜の希望の見えない「パリー」で世界を日本を丹後をどのように見ていたのであろう。

※

「君は偉大な、種蒔く人であった。君は不死だ」と青野季吉は書いているが、このことも個人的な話になって申しあげにくいが、一九五三年から五四年にかけて、晩年の青野さんが早稲田で講義をしておられた。明確に平林初之輔の意識があったわけではないが、青野季吉の講義だけはきいた。佐渡に生まれた青野が平林と同じように師範学校から早稲田に来ていることは知っていた。明治二十五年（一八九二年）十一月八日生まれの平林より二才年上の青野の顔をまじまじとながめながら、異父兄姉、十人の末っ子に生まれた病弱の「青野季吉」を色々おもった。

平林とはちがって、高田師範を卒業した青野は小学校に勤務し、そのあと早稲田に編入している。始め文学青年であった、「青野季吉」が急速に社会主義思想にめざめてくるのは、大正九年（一九二〇年）秋の国際通信社に入社し、外国電報の翻訳を、市川正一、平林初之輔などと始めた頃からである。日本共産党小史の市川正一、大正十年（一九二一年）平林、市川等と共に、「無産階級」を発行した青野季吉。大正十二年（一九二三年）五月の第一次日本共産党首脳部の検挙を契機に「国際通信社」をクビになる。

青野季吉が明治二十三年二月二十四日、市川正一、明治二十五年三月二十日、平林初之輔、明治二十五年十一月八日とほぼ同じ時期に生まれた三人が、大正九年（一九二〇年）の秋の九月、あい前後して国際通信に入社し、外電翻訳の仕事をしながら、マルキシズム研究に三人が没頭した時期である。この時期、平林は「文学革命の意義」「反抗的精神と文芸」「文芸時評―現代文学の正體」「アインシュタイン」の「相対性原理」を大正九年の秋に書いている。青野の言葉を借りるならば、「平林が文芸批評家として多くの仕事を」はたした時期である。「平林が社会主義思想を把握し、その努力の方向が社会運動へ向けられたのは、大正十一年の前後、ちょうど、ロシアにプロレタリア革命があり、ヨーロッパの世界にも一般に革命の波が高まり、それが日本の岸をも打って来た時であった。」

一九二三年（大正十二年）九月一日、関東大震災がおこった。大震災の混乱に乗じて労働組合の指導者や無政府主義者が殺され、多くの朝鮮人が虐殺されたことはよく知られているが、死者三千九百五十九名を出した昭和二年三月七日の丹後大地震をもっと記録する必要がある。

一九一九年（大正八年）「改造」「解放」「我等」の三雑誌が刊行され「大正デモクラシー」の時代性をよく示しているが、関東大震災を機に無力感が文化への背信を生み、退廃的で厭世的な思想が人々の心をとらえ始めた。

平林初之輔の「日本自由主義発達史」の第一版が発行されたのは「大正十三年」「一九二四年の四月二十日」日本評論社からであった。旧制一高の講演の草稿を補足した「日本自由主義発達史」は昭和五十年五月一日発行の「平林初之輔文芸評論全集（全三巻）」にものせられず、駒子夫人が編さんされた、昭和七年二月十二日発行（平凡社）の平林の遺稿集にものせられていないが「日本自由主義発達史」については、「ルソー」や「エミール・ゾラ」や「アラン・ポー」に多くの情熱を注いだ彼が明治維新以来の自由主義思想の発達に深い関心をもっていたことに注意してほしい。「日本自由主義発達史」は「空想から科学」への「テキスト」以前、大正末期の旧制高校の社研の「テキスト」であり、奥丹教組の委員長、川戸利一氏がこの本については、詳しいはずである。

関東大震災後の大転向の風潮の中で平林初之輔は、「労農派的視点」から「明治維新」を次のように述べている。

「日本では欧米諸国のように自由主義の黄金時代がなかった。デモクラシーの時代がなかった。然らば今後も、そういう時代が出現する見込みがないか、或いはそうでないか、山本前内閣の普通選挙提唱は此点に関して、新しい謎を国民に投げた。此の謎を解くためには日本における変態的な資本主義発達の歴史、即ち明治の歴史を注意深く分析してみる必要がある」とこの本の初版が出された大正十三年一月では、日本の敗戦を予測することはとうてい不可能である。「日本自由主義発達史」の最後の章で、平林が「自由・平等の思想は、民間の不平分子と結合して、自由民権の政治運動と化した。ついで自由民権運動は、国会開設の要求という一点に集中した。それから、明治二十二年、憲法が発布され、翌年第一回帝国議会が開会されるまでの政府と民間との一大接戦は、明治歴史を通じて最も教訓的であり、最も深い意義をもっている。」と「日本自由主義発達史」の中で述べている。この本は平林の「文学倫理の諸問題」とか「近世社会思想講話」ほど流布していないが、もっと注目してほしい本である。「明治政府の塔上に、封建残物たる閥族のどくろが〈専制〉の旗を高くひるがえした歴史である。それは、ミルーとルソーとスペンサーとが追われて、ビスマルクとフォン・シュタインとグナイストとが凱歌をあ

げた歴史である」とこの本は、日本も含めて世界の運動が、支配者の巧妙な動きによって、封じこめられる今、明治維新以来の日本の近代史を見直してみる必要がある。

「昭和文学の可能性」平野謙が「世界」に書き、第一版が一九七二年の四月に岩波書店から新書として出されたものだが、その三章は「政治的価値と芸術的価値」と題名がつき、すべて平林のことがのせられている。

「一般にマルクス主義的文学の理論体系は、かくの如く二つの部分――政治的部分と芸術的部分とから成立しているのであることがわかる。しかもこの二つの部分はいい加減につきまぜてあるのではなくて、政治的部分が絶対上位に立ち芸術的部分は下位にたつという風に結合されているのである。この結合の仕方を変えることは、マルクス主義文学の名においては許されないのである。」

たいへん長い文章を引用して平野謙は平林初之輔の「政治的価値と芸術的価値」（新潮・昭和四年三月号）について触れている。従来の勧善懲悪の文学とは、まったく異なるマルクス主義文学という新興の文学を形つくった栄誉を平林はになっている。

※

「山国の秋の夕べは、なつかしや、尾花が上に白き月浮く」

「今年も　また秋になった　二十才の秋　何といふ　淋しさだろう」

「少年の群に、交れば吾が指の節の高きが泣かまほしかり」

平林は明治三十八年（一九〇五年）日露戦争のさなか、溝谷小学校高等科に進学しながら「中学世界」や「文章世界」に和歌をしばしば投稿した。明治四十三年（一九一〇年）四月、彼は京都師範学校に入学した。平林が二年の時、写真の裏に書きつけた。和歌三つが、右の文章である。明治四十四年（一九一一年）十月、父の「平林萬蔵」の死がきっかけとなって師範を中退して上京することになる。戦前、民教、教労運動に参加し、一九三七年、兵庫県御影署に検挙され一〇六日にわたる長い拘留の末、官憲によって絞殺された上宇川村字鞍内に生まれた倉岡愛穂氏の書庫を見た時、平林初之輔と同時期か、少し遅れて京都師範で、うつぼつたる青春を燃やしていたことを知らされた。平林は一九一三年（大正二年）四月に京都師範を中退しているから、倉岡の入学の年を教えてほしいが、もしかしたら一年くらい京都師範で隣り町というか、鞍内（くらうち）の倉岡愛穂は平林初之輔を知っていたかもしれない。京都師範在学中、文学少年でありながら堺利彦氏の著書をむさぼり読んでいた平林は、一九一三年（大正二年）九月、早稲田大学英文科に入学することになる。在学中特待生の待遇をうけていた平林は、大正六年（一九一七年）七月、ロシア革命の年に、早稲田を卒業「アテネ・フランセ」で入学して、フランス語を勉強している。

大正二年、二十二才で早稲田に入り、大正六年、二十六才で卒業しているので、ほかの学生よりも、すこし晩学といってさしつかえないだろう。「アテネ・フランセ」のあと、「やまと新聞社」に入り、大正八年（一九一九年）頃、「ユーゴ全集」の中の小説数篇を翻訳している。この時期、市川正一、青野季吉と平林は親交を深めることになる。

さきにふれた、岩波新書の「昭和文学の可能性」は丹後の人にぜひ読んでほしい本だが、「文学、芸術という、いわゆる上部構造の観念形態を観念形態として、日本において唯物史観的に基礎づけた最初の批評家である」。

口をきわめて平林を「平野謙」はほめている。「日本のプロレタリア文学理論は、平林初之輔・青野季吉・蔵原惟人という順序で、バトンタッチしていった。文芸・芸術の時代性、歴史性、階級性を解明して、まがりなりに、芸術の永遠性という旧来の概念を打破する礎石を築いた名誉は、日本の文学史の上では平林初之輔に所属するのである」と述べている。一九二二年（大正十一年）平林が三十一才の時「種蒔く人」の同人になっている。「種蒔く人」は「小牧近江」「金子洋文」「今野賢三」らによって、一九二一年（大正十年）二月、秋田の土崎版で、「初版本」が創刊され、そのあと一九二二年十月から、東京版「種蒔く人」が発行され、一九二三年十月、関東大震災にさいし「号外」を発刊し、朝鮮人の虐殺に抗議し「種蒔く人」は「種蒔き雑記」を発行することになる。プロレタリア文学史の上

からみるならば、「種蒔く人」はのちに「文芸戦線」に引き継がれていくことになる。

平林初之輔についていうならば、一九二二年二月（大正十一年）相沢駒子と結婚した平林は翌年一月「種蒔く人」同人となっていくことになる。この雑誌は復刻版を見ると、平林が文芸評論の面で大きな役割を果たしていること、五才年の若い、悲劇の主人公のような細井和喜蔵が文学の面で多くの作品を書いている。一九二三年（大正十二年）一月、平林の最初の論文集「無産階級の文化」が泰文社から刊行され、その年の二月二十四日「松非園」？で出版記念会が開かれた。堺利彦とか、秋田雨雀、金子洋文、小牧近江とならんで同じ丹後出身の細井和喜蔵が平林の「無産階級の文化」の出版記念会に参加している。加悦奥の細井和喜蔵、黒部の平林初之輔、いずれも丹後のどすぐろい、海の流れに背をむけて、一筋に生きたものはなんだったのだろう。

「坂野英俊」の「丹後印象」という本が一九九〇年三月、「宮津市日置」の「草ぶえ文庫」から発刊された。写真集や「木子」にはあまり関係のない人間だが、昭和三十九年前後、「木子」「駒倉」細川ガラシヤの「味土野」を歩いた人間にとっては、懐かしい本だった。丹後半島の「宮津」方面が中心になっているきらいがあるが、頁数の関係からそれも、やむをえないであろう。

ただこの本が、丹後破壊の元凶であるといっても、大資本がせせら笑っているかもしれないが、「日置」の「草ぶえ文庫」から出版されていることに注目した。

「黄金色に輝く朝陽」「木子」の「教念寺」を思い出しながら、雪にうもれた「木子」を思い出していた。

「大江山」と「天の橋立」と「丹後ちりめん」をとったら、なにも残らない。「丹後」の中で、「平林初之輔」や「細井和喜蔵」のことを丹後の方に、ぜひ知ってほしい。

平林初之輔が「政治的価値と芸術的価値」（新潮、昭和四年三月号）の中で「広義におけるプロレタリア文学とマルクス主義文学との相違は、前者は大衆の文学であり、後者は前衛の文学であるという点に存する。前者は政治的目的を意識せずに自然に発生し成長してきた文学であり、後者は明確に政治的目的を意識して、その目的を遂行するためにかかれた文学であるという点に存する」。

平野謙は平林を高く評価し、「プロレタリア文学を功利主義的文学観に立脚するものとみなす」立場をとっているが、「古びた勧善懲悪などとは質的に異なった、その功利主義の新しい性格を」文学の上にもち込んだ栄誉を平林は背負っている。

「むかしから芸術のための芸術の流れが一方にあり、それに対立する人生のための芸術の流れが他方にあった」

一方的な考え方かもしれないが、自分とそのまわりの歴史学と地方史にくらべて、マルクス主義文学が宮本百合子と二、三の人たちを除いて、弱いような気がする。もちろん「トルストイ」の「芸術とは何か」も読んでいないし「クローチェ」の「芸術は表現なり」も読んでいない。ただ平林初之輔が必死に追いかけていたものがなにであったか、その点を丹後の人にぜひ知ってほしい。若狭や但馬に比べて、「文学」がなぜ丹後に育たないのか、僕が知らないのかもしれないが、丹後の若い人たちに、ぜひ追求してもらいたい。

とりとめない、平林初之輔の小論を次の言葉で終ろう。大正十四年八月、東京「本郷」の三丁目の燕楽軒で、細井和喜蔵の「女工哀史」の出版記念会がもたれた。恒中均さんのお姉さんが、平林初之輔の長男、平林安曇氏のもとに嫁いでおられる。恒中均氏にかつて見せていただいた「青野季吉」の「文学五十年」のなかに、細井和喜蔵の出版記念会の写真がのせられていた。プロレタリア文学のというより、明治以降の日本文学史を飾る、平林初之輔と細井和喜蔵、ともに丹後が生みだした逸材が「燕楽軒」の写真の中にたっている。「ハカマ」をはいて、あいさつする細井和喜蔵の隣につれそうように、平林がたっておられる。

もちろん「女工哀史」の出版の上で、藤森成吉氏の意味は大きい。平林よりも五才年下の細井和喜蔵が、平林から多くの助言を受けたであろう。金剛童子と「平林初之輔」大江山と「細井和喜蔵」鬼になろうと、必死に生きた二人、丹後の人にもっと、この二人を注意

してほしい。

「長い縄手や　黒部の縄手
いつか行きつく峰山へと
竹野川の川筋を　逆に逆に
パリーまでたどりついた
平林初之輔よ　新しい地平を
丹後にきりひらいた　平林よ
あなたの　きりひらいた
新しい時代の灯は　今も生きている
長い縄手や　黒部の縄手
いつか行きつく峰山へと
竹野川の川筋を　逆にさかのぼった
平林よ　地の塩のような
時代の種を蒔いた
平林初之輔に　拍手をおくる」

一九二三年九月一日、関東大震災がおこったとき、平林は長野県下を講演旅行中であった。平林は十月、郷土の黒部に帰っている。一九二四年四月「文芸戦線」が「種蒔く人」の後を受けて創刊された。

一九二五年（大正十四年）「ルソー」の「民約論」が翻訳された。一九二五年十月、雑誌「解放」が復活された。大正十五年十二月、博文館に入社、雑誌「太陽」の編集主幹となる。大正から昭和へ、平林は次第に「マルキシズム」の主流から離れてゆく。

一九二七年（昭和二年）一月「山吹町殺人事件」を「新青年」に、「日本自由主義発達史序論」を「新政」に発表した。

昭和六年二月十一日、東京を出発、フランスに向かった。神戸から上船し、門司・上海・香港と平林は、駒子さんによく手紙を出した。初期プロレタリア文学の若き指導的理論家として活躍し、文学を科学的に社会の一現象として文学理論を論理的につくった平林の名誉は今も消えてはいない。文学と美学、それに映画、探偵小説と幅広く、竹野川の川筋をパリーにまでさかのぼった平林初之輔を丹後で勉強してもらいたい。

（やぎ　やすたか・故人）

特集　二〇〇〇年を迎えて

人間社会を解く「定理」

村島　昭男

私の生まれた一九三三年は、一月に日本軍が山海関占領、二月に熱河省に進攻し、国連が満州国撤退を議決、孤立した日本は国連脱退、東洋のきらわれものの道に深入りする。

この年はまた、一月に河上肇が検挙され、二月、プロレタリア作家の小林多喜二が、捕まったその日の内に、東京築地警察署で虐殺される。そして五月、京大の滝川教授が鳩山一郎文相によって罷免される。以後敗戦までの私の少年期は、戦争の明け暮れであった。

当然、軍国主義に染められ、勝った勝ったの宣伝を寸分疑わなかった。ところが戦争に負けて口惜しいと思うより、世の中が明るくなってうれしかったのだから、軍靴の音しかない暗い、押さえつけられる時代は、子供心にも嫌がっていた証しである。そして民主主義も社会主義も同義に思えた。なぜなら共に牢獄につながれていた仲間だったからだ。

幸い高校では、家永三郎の「日本史」がテキストで、歴史を事実に基づいて、科学的に総括する立場から記述されていたので、後の歴史認識に役立った。

歴史は自然現象ではなく社会現象だから、まさに人為現象だ。人間がつくり上げた政治現象とも言えるのだ。確かにその底に事物の弁証法的発展の法則が働いているが、多くの事件や流れの基には、人の意図や意識が介在していて、天然自然の現象とは異なるのだ。

その意図とは何か、誰が事件を引きおこし何の目的で社会を動かしているのか。そんな事までは教科では教わらなかったが、次第にわかって来たのは、科学的社会主義に接するに及んでである。

数学に定理があり、物理に法則があるように、人間社会にも法則

がある。「人間の社会は階級社会であり、人間の歴史は階級闘争の歴史である」というマルクスの解析だ。

従って歴史という人為現象は、正しく階級社会の事象であり、多くは階級的利害に基づいて引き起こされる。戦争はその典型だ。

問題はこの「階級的観点」というキーワードだ。物理でも数学でもちゃんと定理や法則を教えるのに、「社会」を解くカギは依然として「法則」がないかの様に教えない。何故か、それは権力を持つ階級の支配の構造をかくす為以外にない。ここではっきりした事は、文部省こそ、階級社会の教科書的存在であることである。

（むらしま　あきお・松戸市在住）

戦争時代を顧みて

田代　幸子

私は一九二三年関東大震災の年に生まれた。震災で暴動を起こすと流布されて多くの朝鮮人が殺された。直後、治安維持のためにする罰則が制定され、一九二五年には治安維持法が公布された。翌年にはそれによる検挙があり、一九二八年には一、六〇〇人の共産党員や社会主義者が検挙されている。（三・一五事件）これ等のことは私は戦後になって知ったことであるが、満州事変遂行のために法規制や思想弾圧が着々と進められていたことが伺える。震災後の不況、経済恐慌による失業者の増加、東北では凶作で少身の身売り、これ等の社会情勢を打開するために、「満州は日本の生命線」などと言って中国侵略の道を始めたのではないか。明治以降、植民地政策で経済発展した欧米を手本に進めてきた脱亜入欧の政策に他ならない。日清、日露戦による台湾（一八九五年）、韓国（一九一〇年）、の領有で味をしめ、侵略政策を一層強めたのであろう。

満州事変、私が小学校二年の一九三一年、柳条湖で日本の関東軍による満鉄爆破があり満州事変を起こし、全満州を占領した。国民には中国軍による爆破と知らされ、その征圧のための戦いと報道された。十五年戦争の始まりである。一九三四年には満州傀儡政権を作り皇帝となった溥儀が京都にも来て宿泊していた都ホテルに京都中の小学生が日の丸を振って式典に参加させられ万歳を叫んだ。

一九三六年、青年将校によるクーデター（二・二六事件）があり内大臣の斉藤実、大蔵大臣の高橋是清が殺された。東京は戒厳令が布かれ雪の中歩哨に立つ兵士の姿が新聞の一面に大きく載ったのを覚えている。事件後、軍人が大臣になったり日独防共協定が結ばれたり軍部の政治支配が強まった。しかしその年はベルリンオリンピックが夏に開かれ、学校も街も賑わい、世の中の危険な動きに無関心であった。今、スポーツだけが明るい大ニュースというのと同じように思う。

翌一九三七年（女学校二年）、盧溝橋事件があり日中戦争が始まった。南京を占領した祝賀の報道はされても大虐殺をやったことなど全く知らされない。今でも認めない人がいる位、真実を隠し聖戦だの八紘一宇だのと言って国民を騙し、国家総動員法を公布し戦争に駆りたてた。一九四〇年（女学校五年）、紀元二六〇〇年ということで祝賀行事が催されて（戦後になるまで年号は紀元で表記、神話歴史と併せて教えられた）、御所で日の丸を振り君が代演奏の式典があった。第二次世界大戦も始まっており（ドイツポーランド進撃）二六〇〇年行事は国威発揚の機会とされたのであろう。

翌一九四一年十二月（女高師一年）、太平洋戦争が始まった。その前に治安維持法が改定（予防拘禁制）されたり学校では軍事教練があったり、教育勅語だけの授業があったり、更に大きな戦争になるという危機感はあった。いよいよ始まると、衣料・食糧の統制、学徒出陣、学徒勤労動員など耐乏の中で戦争優先の学生生活を送った。ろくろく勉強もせず半年早く一九四四年九月卒業し府二女（現朱雀高）に就職した。学校はどこでも軍需生産に動員され、四年生は伊丹の三菱重工、五年と補習

科は学校に特設された島津工場で、下級生は授業であったが畑に農耕作業に行くことも多かった。私は伊丹と学校での授業、学校工場を一ヶ月毎に繰り返したが一九四五年四月からは一年の担任となり修身を持たされた。教育勅語の次に国体の本義、皇国の精神、臣民の道忠孝一本などの題目の列んでいたが、教科書を読むばかりで一学期の終りに一年分を終えてしまった。学年主任から「修身は数学や理科と違い、国民としての自覚、生き方を示す一番大切な課目であるのに一体どういう気か」と大変叱られた。

八月十五日終戦となり空襲がないことと、修身の授業がなくなったことが何よりも嬉しかった。修身の本を校庭に掘られた穴に皆で投げ入れて焼いた光景は忘れられない。私にはほっとするものであったが、生徒は敗戦の悔しさ、教科書まで焼き捨てねばならぬ哀しさに涙を浮かべている子が沢山いた。私はそのような純情な生徒に修身を教えてしまったことを申し訳なく恥ずかしく思う。

戦後になり私達に希望を持たせ、生き方に指針を与えたのは新憲法と教育基本法であった。平和主義と基本的人権の尊重を基調とし戦争放棄を明示する憲法のおかげで半世紀の間、戦争を起こしたり巻き込まれたりせずに過ごせた。しかし現在、阪神大震災後の不況、戦争を合理化する新ガイドライン、治安維持法のような盗聴法、主権在民を無視する日の丸君が代の押し付け、更には改憲の動きなど、失継早に戦争準備が進められていることに不安と恐怖を持つ。また、世界制覇を目指しているとも思えるアメリカのいいなりになり日本の主権をないがしろにする行政は腹立たしいかぎりである。この情勢の中で、戦争に協力させられた悔しさを伝えるとともに、二十一世紀を担う若い人達が世の動きに関心を持ち、真実を見極め、平和で豊かな社会を築いてほしいと願っている。

（たしろ　さちこ・京都市在住）

追悼　前代表天野和夫先生

一九九五年から九八年にわたり本会代表をつとめられた天野和夫先生は二〇〇〇年三月二十三日に逝去されました。七十六歳でした。生前には立命館総長、日本法哲学会理事長、日本学術会議会員として、またとくに憲法運動に力をつくされました。晩年にはリューマチ症に悩まれ、入退院を繰り返されましたが、いつも「燎原」の発展を念じて暖かく支援して下さいました。ここに生前の先生の御貢献に感謝し、謹んで御冥福をお祈りいたします。

（岩井）

総会および春の例会

六月十日（土）
一時三〇分～四時三〇分
おいけ互助会館　御池両替町上ル
（地下鉄烏丸御池駅歩三分）
TEL〇七五―二二一―四九〇〇
講演と話し合い
大八木　賢　治　氏
（京都歴史教育者協議会事務局長）
西　尾　幹　二
『国民の歴史』批判
―教育の現場から―

〈訂正〉　前号会告の燎原合本号数が五〇〇号までとなっていました。正しくは五〇号までです。おわびして訂正させて頂きます。

編集後記

今年は戦後五十五年にあたります。いま政府与党は教育改革をとなえて教育基本法まで再検討しようとしています。思いかえすと戦後の六・三・三・四制教育の出発は、教師も子どもも忘れがたい清新の気にみちていました。あの志を忘れぬためにも、当時の教師や子どもであった方々の思い出をつのります。

堀江保次さんのお世話で『郷土と美術』（一九九九年七月、平林初之輔紀年号）から故八木康敞氏の力作を掲載することができました。「戦後教育の思い出」とともに「安保闘争五〇年」の原稿を引き続き募集しています。

総会への御出席といま話題の「自由主義史観」の教育界への影響をめぐる討論に御参加ください。

会および会報については、左記へご連絡ください。

〔事務局〕
〒六〇五―〇九五三
京都市東山区今熊野
南日吉町三九　奥村和郎
TEL
FAX　〇七五―五六一―七四八五